

東峰村営住宅中原団地建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

# 中原遺跡

—福岡県朝倉郡東峰村所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第273集

2020

九州歴史資料館

## 序

本書は、平成 29 年 7 月九州北部豪雨の被害を受けた東峰村における復興事業である東峰村営住宅中原団地建設事業に伴い実施した、中原遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡は宝珠山川の右岸に立地し、西には中世宝珠山氏の城と伝わる烏岳城があり、遺跡の周辺には近世の英彦山へ参詣道があった場所でもあります。今回の調査では中世から近世にかけての集落や遺物が発見されましたが、旧宝珠山村地域では過去に集落遺跡の発掘調査事例がなく、地域の歴史を知る上で重要な調査事例と言えるでしょう。

最後になりましたが、九州北部豪雨で被害を受けられた方々へ一日でも早い復興を祈念しますとともに、本書が教育、研究、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。なお、発掘調査に関係した機関や地元の方々を始め多くの方に御協力・御助言いただきました。ここに深く感謝いたします。

令和 2 年 3 月

九州歴史資料館

館長 杉光 誠

# 例 言

1. 本書は、平成 30 年度に東峰村営住宅中原団地建設事業に伴い、九州歴史資料館が実施した中原遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘作業および整理作業、報告書作成は福岡県建築都市部県営住宅課の執行委任を受けて九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真は岡田諭が撮影した。
4. 本書に掲載した遺構図は岡田が作成した。
5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、進村真之の指導の下で実施した。
6. 出土遺物および図面・写真等の記録類は九州歴史資料館において保管している。
7. 本書に使用した周辺遺跡分布図は、東峰村教育委員会が 2013 年に刊行した『東峰村内遺跡等分布地図』（東峰村文化財調査報告書第 3 集）の該当頁を加筆して作成したものである。
8. 本書の執筆と編集は岡田がおこなった。

## 目次

I はじめに	1
1 調査に至る経緯と調査の経過	1
2 調査の組織	1
II 位置と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 発掘調査の記録	4
1 概要	4
2 1号掘立柱建物跡	6
3 2号掘立柱建物跡	6
4 1号土坑	6
5 出土遺物	6
IV おわりに	10

## 挿図目次

第 1 図 東峰村の位置	2
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/1,5000)	3
第 3 図 調査対象地位置図 (1/1,000)	4
第 4 図 調査区全体図 (1/400)	5
第 5 図 1号・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	7
第 6 図 1号土坑図 (1/30)	8
第 7 図 出土遺物実測図 (1/3)	9

## 表目次

第 1 表 P39,P41 土層注記	7
第 2 表 1号土坑土層注記	8

## 写真図版目次

写真図版 1 1. 遺跡遠景 (南東から)	2. 遺跡遠景 (南から)	3. 遺跡遠景 (北から)
写真図版 2 1.1 区全景	2.P12 柱根検出状況	3.P38 柱根検出状況
写真図版 3 1.P39 柱穴断面	2.P40 柱根検出状況	3.P41 柱穴断面
写真図版 4 1.1 号土坑木杵検出状況	2.1 号土坑完掘状況 4	3.1 号土坑土層断面
写真図版 5 1.2 区西端から 1/4 (北から)	2.2 区西端から 2/4 (北から)	3.2 区西端から 3/4 (北から)
写真図版 6 1.2 区西端から 4/4 (北から)	2.2 区 P45 断面 (南から)	3. 基本土層 (工事掘削箇所)
写真図版 7 中原遺跡出土遺物		

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯と調査の経過

東峰村は平成 29 年 7 月に発生した九州北部豪雨により甚大な被害を受けた。本来、自ら住宅を確保することが困難な被災者に対して整備される復興住宅は、市町村が主体となって整備するものであるが、東峰村は職員数の不足や、建築職員の不在による技術力が不足していることから、県に委託してその整備を行うことになった。このため、公営住宅整備の実績がある県営住宅課が受託して被災地での住宅整備を行うことになった。

今回の調査対象地は、上記の団地建設事業によって影響を受ける中原遺跡（なかばるいせき）の一部である。県文化財保護課が今回の事業を把握した後、11 月 14・15 日に工事予定範囲内で試掘調査を実施したところ、柱穴等の遺構や中世等の遺物を確認したため、埋蔵文化財包蔵地として周知化し、県営住宅課及び東峰村に対して工事に先立ち発掘調査を実施することになった。なお、整理作業・報告書作成は令和元年度実施した。発掘作業の経過は下記の通りである。

- 11 月 29 日 県営住宅課と発掘調査に関する執行委任の協定締結。
- 12 月 5 日 西側調査区西端付近で擁壁工事の立会。遺構遺物なし。周辺を調査範囲から除外。
- 12 月 13 日 西側調査区重機掘削開始。
- 12 月 14 日 作業員投入。
- 12 月 21 日 柱根検出。掘立柱建物の存在確実。遺物は中世から近世を確認。
- 12 月 25 日 空中写真撮影。
- 12 月 27 日 西側調査区調査完了。
- 12 月 28 日 埋蔵文化財発掘調査の着手報告（99 条）。
- 1 月 8 日 東側調査区重機掘削。
- 1 月 9 日 東側調査区遺構検出。
- 1 月 17 日 東側調査区調査完了。埋戻し不要で即日工事に引渡し。（作業日数 17 日）
- 1 月 18 日 埋蔵物発見届提出。
- 1 月 25 日 終了届提出。

## 2 調査の組織

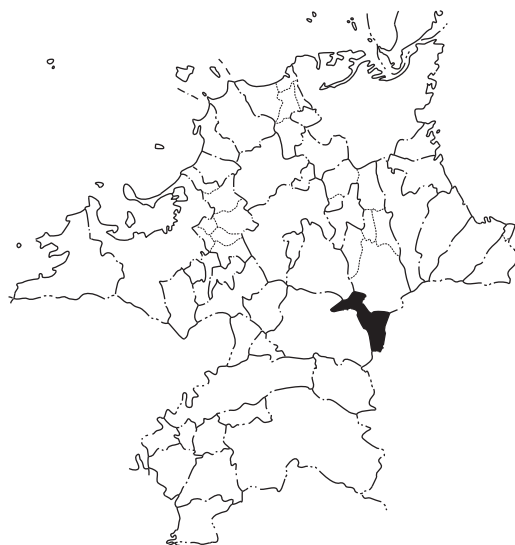
発掘作業・整理作業・報告書作成にかかる関係者は以下の通りである。

	平成 30 年度	令和元年度
建築都市部県営住宅課		
課長	讃井人志	永山慎治
住宅設計係長	中村琢磨	中村琢磨
主任技師	田中啓介	田中啓介
九州歴史資料館		
館長	杉光 誠	杉光 誠
副館長	東 良	安永千里
総務室長	尾籠哲弥	中村満喜子
総務班長	中村満喜子	畑山 智
事務主査	林田朋子	林田朋子
主任主事	原野貴生	古賀知香
主事	具志堅靖知	具志堅靖知
文化財調査室長	吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査室長補佐	伊崎俊秋	伊崎俊秋
文化財調査班長	森井啓次	森井啓次
参事補佐	小川泰樹	小川泰樹
企画主査		進村真之（整理作業担当）
技術主査	岡田 諭（発掘作業担当）	岡田 諭（報告書作成）

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

中原遺跡は平成 17 年に合併して誕生した朝倉郡東峰村の内、旧宝珠山村域に所在する。旧宝珠山村域の地形を概観すると、英彦山を中心とする火山山地を水源とする宝珠山川と大行司で合流する大肥川を中心とした山間地である。基礎となる地質は新生代第三紀後期から第四紀にかけての英彦山一帯の火山の噴火による溶岩流によって覆われてできた台地であり、宝珠山川などがこの台地を侵食することによって谷地形が形成され、現在の地形が成り立っている。本遺跡は西側の城ヶ迫山から南に派生する尾根の東側斜面が宝珠山川付近で平坦になる場所に立地し、地形分類上は土石流扇状台地である。



第 1 図 東峰村の位置

### 2 歴史的環境

旧宝珠山村域では遺跡の発掘調査事例が少ない。旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡の調査事例は未だないが、本遺跡から宝珠山川沿いに約 3km 北に位置する伊王寺地区に磨製石斧と黒曜石製石鏃が工事中に見つかっており（東峰村 2010『宝珠山村誌』）、伊王寺遺跡として知られている（福岡県教育委員会 1978『福岡県遺跡等分布地図』甘木朝倉編）。

中原遺跡から 3.4km 北に位置する岩屋神社は 1698（元禄 11）年に建立された国指定重要文化財の本殿を有する。2005（平成 17）年に本殿の解体修理工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代前期後半の板付Ⅱ式の壺の破片や中期前半の城ノ越式の甕の破片が出土している（東峰村教育委員会 2007 東峰村文化財調査報告書第 1 集『岩屋神社遺跡』）。明確な遺構には伴わないが、当地に弥生時代から人間が活動していたことの証左と言える。この調査では 15 世紀代と近世の宝殿跡が確認された他、奈良時代から近世の遺物が出土した。特に 8 世紀中葉の鉄鉢形の土師器鉢は岩屋神社遺跡で山岳信仰に係る活動が始まった時期を示すものとして重要である。また、遺構は確認されなかったが、8～10 世紀の遺物や 13 世紀後葉から 15 世紀中葉の土器や古銭が出土したことから、連綿と宗教活動が行われていたことがわかる。伊王寺遺跡より南西約 300m の場所には阿弥陀堂遺跡がある。県道建設により破壊される阿弥陀堂の調査であったが、御堂背面の岸壁に 14 世紀末葉～15 世紀初葉と推定される摩崖宝篋印塔 2 基が彫られていた（福岡県教育委員会 昭和 57 年福岡県文化財調査報告書第 64 集『阿弥陀堂遺跡』）。

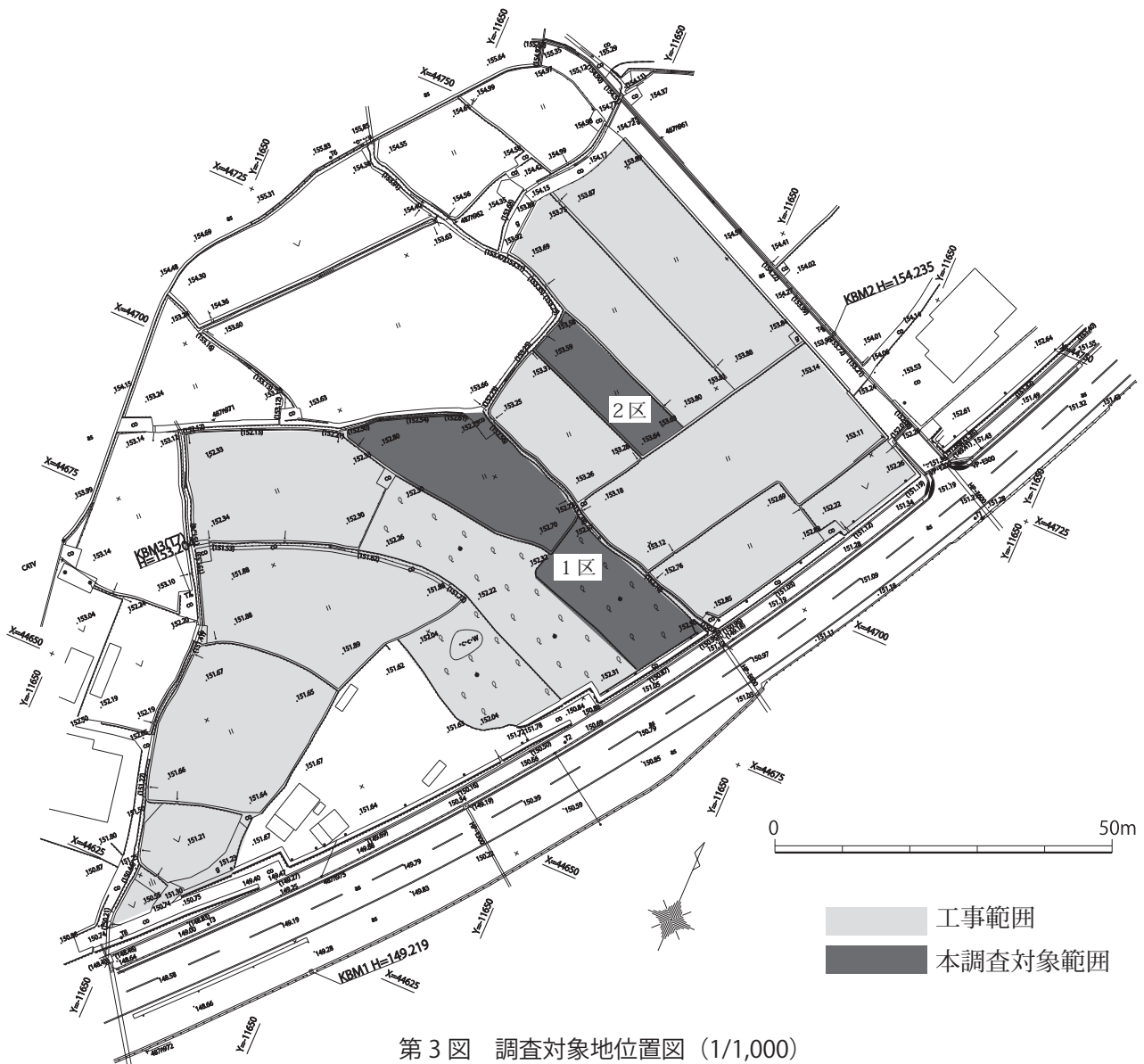
一方、中原遺跡の周辺には中世山城が展開する。先述の伊王寺遺跡の付近では 1350（貞和 6）年築城と伝わる伊王寺城がある。戦国期の宝珠山氏主城と伝わり、14～17 世紀代の国産および中国産陶磁器類が採集されている。中原遺跡の 1.5km 北には標高 545m の城ヶ迫という山がある。この山から南に細長く伸びる幅約 10m 長さ約 250m の細長い尾根上に宝珠山氏が城主とされる烏岳城がある。細長い尾根だが平坦面や堀切などが認められ、「城の平」の地名が残る。また、烏岳

1. 中原遺跡
2. 伊王寺遺跡
3. 伊王寺城跡
4. 伊王寺跡
5. 岩屋神社遺跡
6. 烏岳城跡
7. 城ヶ辻城跡
8. 馬場遺跡  
(城ヶ辻城城下遺跡)
9. 阿弥陀堂遺跡
10. 法光寺跡



第2図 周辺遺跡分布図 (1/1,5000)

城から南東に伸びる尾根上に「城ヶ辻」という地名があり、大きめの石材を用いた石垣が残る（福岡県教育委員会 2014 福岡県文化財調査報告書第 249 集『福岡県の中近世城館跡 I』）。「城ヶ辻」の麓は「馬場」という地名があり、東峰村の遺跡地図には馬場遺跡として掲載されている。県道八女香春線改良工事に伴う発掘調査では、城ヶ辻城城下遺跡として調査され、中世の掘立柱建物跡を構成する柱穴や溝などの遺構が確認され、中世の中国青磁や白磁、土師器片と近世の陶磁器片、少量の縄文土器片が出土した（福岡県教育委員会 2003『福岡県埋蔵文化財調査年報 - 平成 13 年度 -』）。



第3図 調査対象地位置図 (1/1,000)

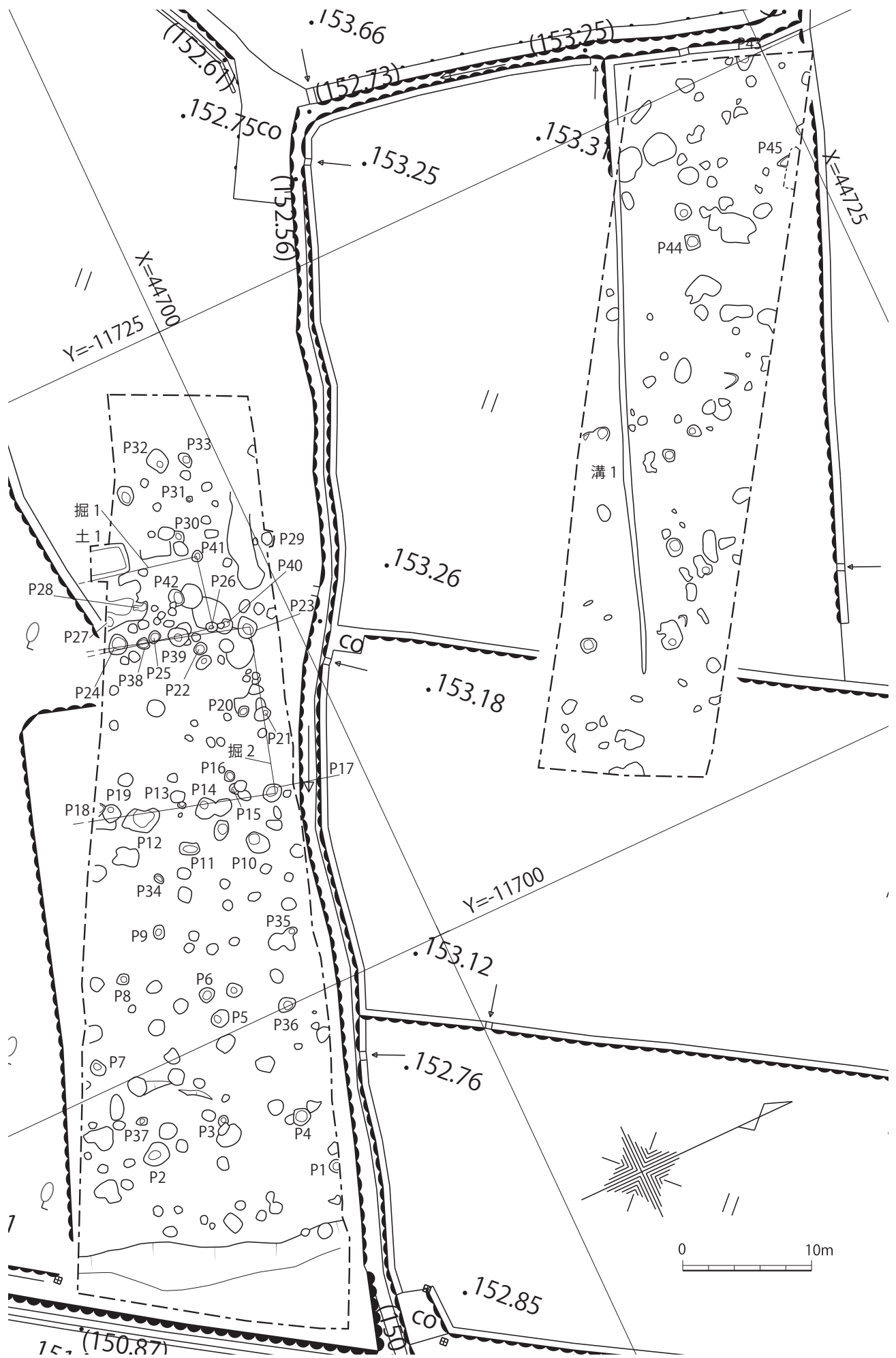
### III 発掘調査の記録

#### 1 概要

調査対象地は工事範囲の内、試掘調査で遺構遺物が確認された箇所である。南側の調査区を1区、北側の調査区を2区と呼称する。1区の西端付近で擁壁工事の立会をしたところ、床土の下位は灰白色巨礫混じり砂質土の地山であった。状況から遺構もなく、1区の西側1/3を本調査の範囲から除外した。また、2区も当初想定していた範囲と若干変わったため、最終的な調査面積は300m<sup>2</sup>である。

基本層序は耕作土、床土、以下地山で、黄褐色～黄白色粘質土、灰白色～褐色礫混じり砂質土、岩盤である。調査終了後に工事による掘削箇所を観察した結果、地山各層の層理面はうねりがあり、不安定な状況で堆積したと考えられる。遺構検出面は地山上面の1面であるが、山手側から川側に向かって灰白色礫混じり砂質土、黄褐色粘質土、褐色礫混じり砂質土と地山が変化するため、土地利用の過程で削平されたと考えられる。

検出遺構は掘立建物跡2棟、土坑1基の他、柱穴を含む小穴群を検出した。復元される建物は2棟であるが、柱穴の数から他にも建物があったと考えられる。



第4図 調査区全体図 (1/400)



## 2 1号掘立柱建物跡（第5図）

1区中央で検出した梁行2間、桁行2間以上の掘立柱建物跡である。主軸は東に約19度振っている。梁間寸法は約2.5m、桁間寸法は約2m、梁行総長約5m、桁行総長4m以上、確認した柱穴はP12、P14、P17、P21、P23、P24、P39の7基で、内P23、P24、P39で柱根が残存していた。柱の径は15cm～20cmで程度で、根入れの深さは約50～70cmである。遺物が出土した柱穴はP12から鳥形の土製品と18世紀代の有田焼の磁器片、P23とP24から陶器の播鉢が出土した。従って、建物の廃絶時期は18世紀代以降と考えられる。

## 3 2号掘立柱建物跡（第5図）

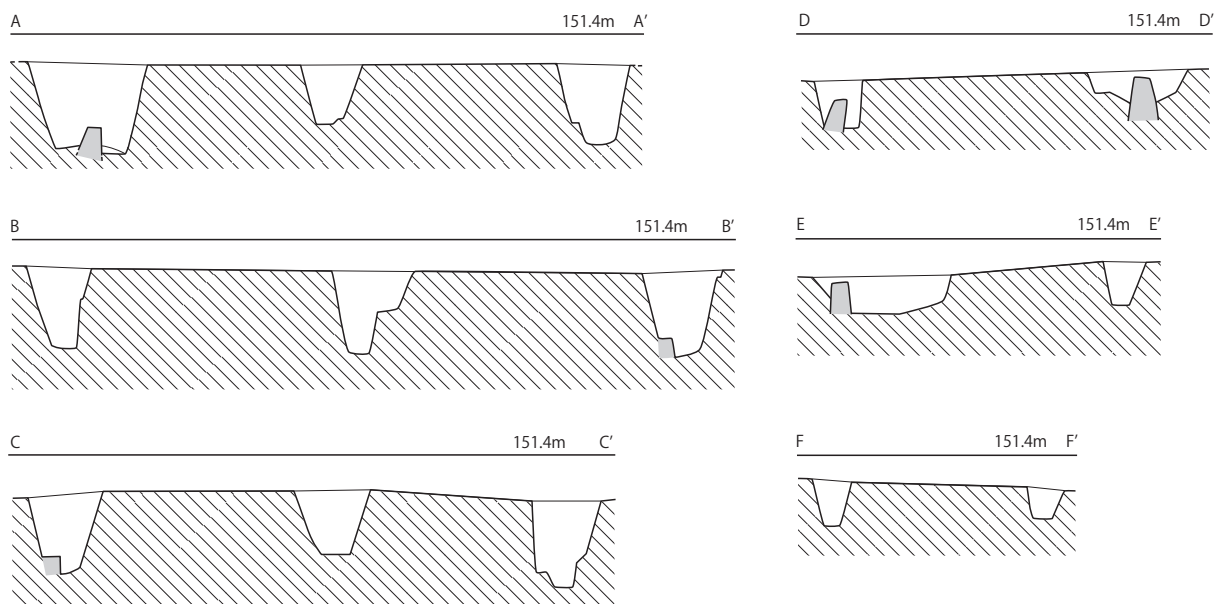
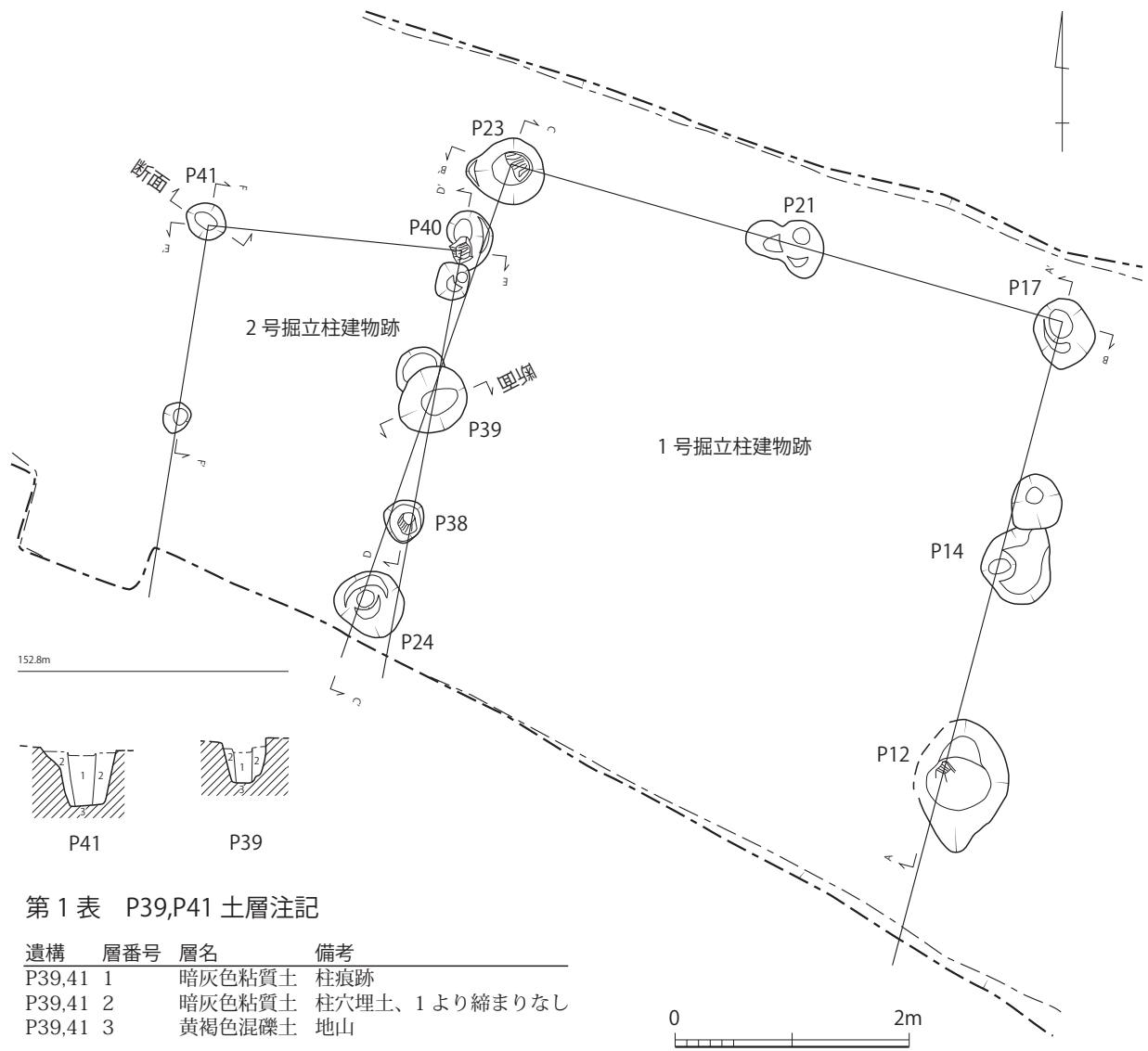
1号掘立柱建物跡に先行する梁行き1間、桁行1間以上の掘立柱建物跡で、1号掘立柱建物跡の西側の柱筋と位置が重複する。主軸は東に約10度振っている。梁間寸法は約2.1m、桁間寸法1.6m～2.4mと一定しない。梁間総長は2.1m、桁行総長は3.5m以上、確認した柱穴は4基でP38、P40、P41で柱根が残存しており、特にP40で検出した柱根は一辺約15cmの角柱であった。根入れの深さは約22cm～42cm、遺物は出土しなかった。

## 4 1号土坑（第6図）

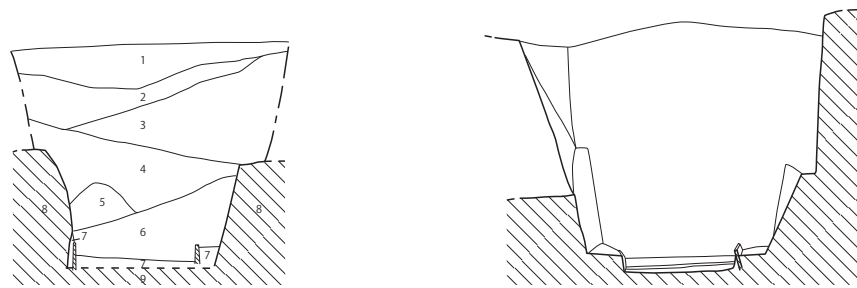
2号掘立柱建物跡の西側で検出した。規模は短辺約90cm、長辺約115cm、深さ約60cm、形状は長方形、主軸は約13度東に振る。土坑底部に板を井桁上に組む構造が確認された。木枠の組み方は、土坑中央底面に、端部がホゾ状に加工された幅10cm長さ90cmの板を30cm間隔で主軸に直行するように平置きし、土坑長辺の壁面に幅10cm、長さ90cmの板を立てて置く。長辺側の板は底面の板と組む場所にホゾの切れ込みがある。木枠で組まれた部分の内寸は幅約43cm土坑の掘削範囲より一回り狭い範囲に組んでいる。土層断面から土坑の掘削から埋没までの過程を検討すると、まず、黄褐色粘質土の地山を40cm以上掘削し、木枠を組む。そして木枠の外側に掘削土を使って裏込めをする。木枠の中に堆積した土は地山のブロック土を含むので、掘削土により埋没したと考えられる。出土遺物に凶化できるものはなかったが、木枠の裏込めから土師器片1、覆土から瓦質土器片1、土師器片1、高取焼片1、陶器片3が出土した。位置関係から2号掘立柱建物跡とは併存せず、単独あるいは1号掘立柱建物跡に伴うものと考えられるが、機能や用途については不明である。

## 5 出土遺物

1は1区包含層から出土した土師器環である。口縁部は残存せず、復元底径は8cm、底部は回転糸切である。2は1区P23から出土した瓦質土器の蓋である。端部は平坦で内側に返りがつく。器厚は7mmと厚く、色調は内外面共に灰色を呈する。3は1区P33から出土した瓦質土器であり、深鉢であろうか。口縁部外面やや下方に2状の突帯があり、突帯間に印花文が3個押捺される。内面は口縁部付近に指頭痕のような凹みがあり、下部は当具痕が確認できる。器厚は口縁端部が1.3cm、突帯下部は7mmである。色調は内外面共に暗灰色を呈する。4は1区包含層から出土した内ヶ磯窯産陶器の片口である。復元口径16.8cm、器厚は4mm、口縁部は外反し、口縁部やや下方に注ぎ口が付く。口縁部の内外面から外面注ぎ口付近までが褐色釉、注ぎ口から胴部までが

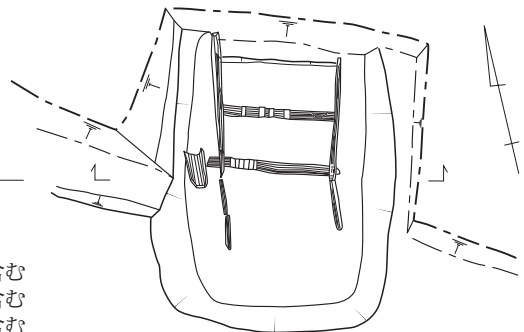


第5図 1号・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



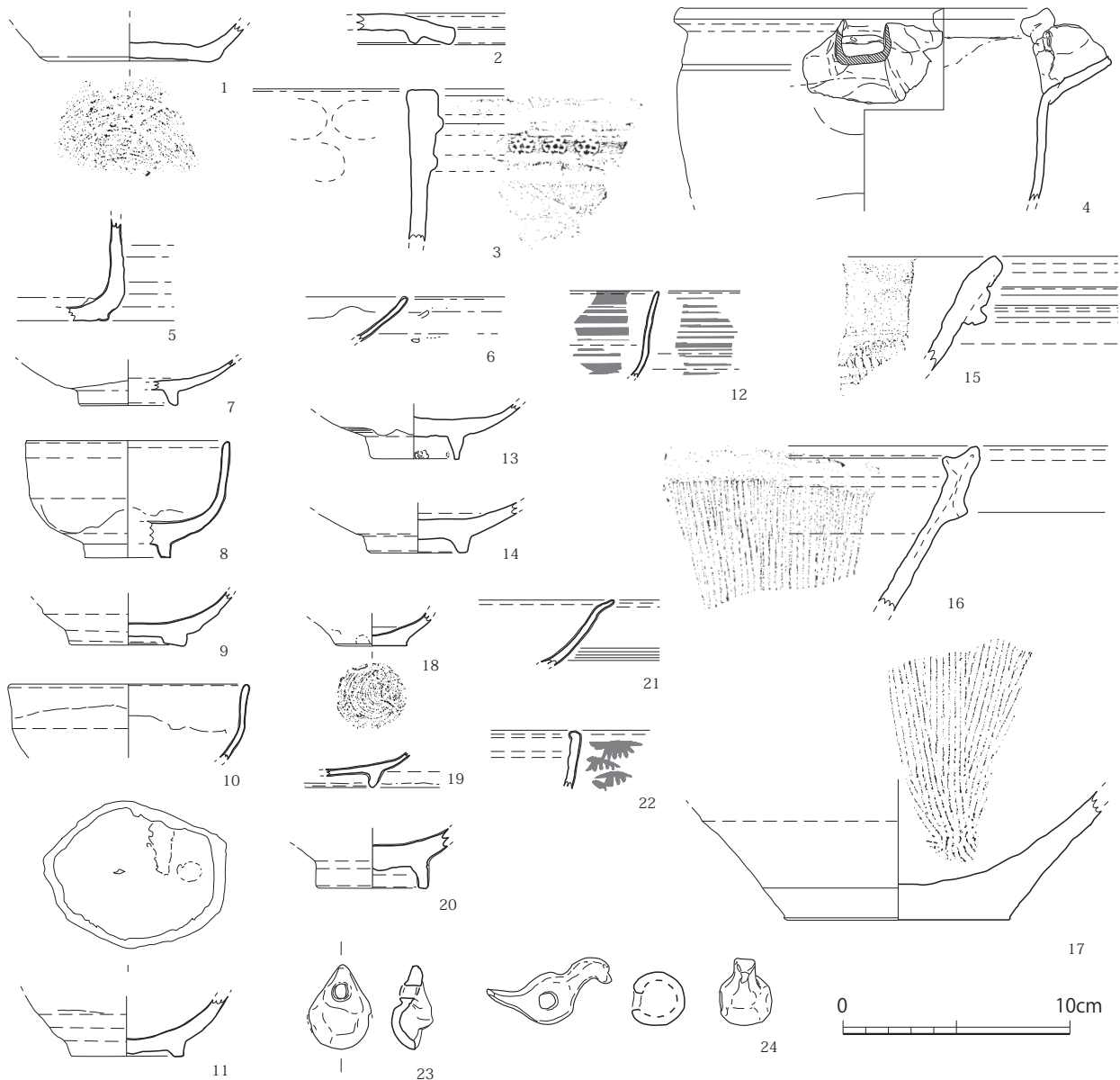
第2表 1号土坑土層注記

層番号	層名	備考
1	真砂	造成土
2	暗褐色礫混じり粘質土	造成土
3	暗灰褐色粘質土	床土
4	灰黄褐色粘質土	1号土坑埋土、8層のブロック土を含む
5	黄灰褐色粘質土	1号土坑埋土、8層のブロック土を含む
6	灰白褐色粘質土	1号土坑埋土、8層のブロック土を含む
7	暗灰褐色粘質土	板材の裏込め、8層のブロック土を含む
8	黄褐色粘質土	地山
9	青灰色砂質土	地山



第6図 1号土坑図 (1/30)

乳白色釉、さらに下位は褐色釉が施釉される。5は1区P35から出土した陶器水差しの底部である。内ヶ磯窯産か。内面の釉調は光沢のある緑黄色で、外面の底部や体部にも施釉する。また、内面に釉溜りのようなものがある。6は1区P25から出土した高取焼後期の皿か。器厚は3mm、釉調は内面が褐色と光沢のある灰色、外面が褐色である。7は1区包含層から出土した高取焼中後期の碗である。復元高台径4.4cm、器厚は底部で4mm、体部で2mmである。高台は削り出し。釉調は外面褐色、内面飴色で、見込と高台付近は施釉しない。また、内面に細かい貫入がある。8は1区包含層から出土した高取焼系統の小碗である。復元口径は9.0cm、復元高台径は3.8cm、器高は5.2cm、器厚は底部が1.0cm、体部から口縁部が4mmである。釉調は内面が褐色で見込は緑灰色、外面は口縁部から底部付近までが緑灰色で、底部が褐色である。9は1区P13から出土した高取焼の碗である。高台径は5.2cm、器厚6mm、体部は4mmである。高台は削り出し。釉調は内外面暗緑色で、細かい貫入がある。10は1区P25から出土した高取焼の碗である。復元口径10.4cm、器厚は3mmである。釉調は口縁部内外面が黄緑色、下位は褐色である。11は1区包含層から出土した高取焼の碗である。高台径は4.9cm、器厚は6mmである。釉調は内外面淡茶灰色で、見込に黒褐色の斑がみられ、外面には釉垂れがあり、畳付けにも釉が付着する。12は陶器の碗口縁部片である。内外面共に白色の刷毛目が横方向に施される。高取焼か武雄か。13は調査区西端のA号重力擁壁工事の立会時に出土した高取焼系統の碗である。高台径は2.9cm、器厚は底部が8mm、体部が3mmである。高台は削り出しである。釉調は内外面共に褐色から黒色だが、



第7図 出土遺物実測図 (1/3)

見込部分は蛇の目状に釉剥ぎされ、重ね焼きの痕跡が残る。14は1区包含層から出土した陶器の碗である。復元高台径は4.4cm、器厚は底部が9mm、体部が5mmである。高台は削り出しである。釉調は乳白色で、見込は蛇の目状に釉剥ぎされている。15は1区P23から出土した陶器の播鉢である。口縁外面に粘土を付加し、肥厚させ二条の沈線を施す。内面摺り目が確認できるが、体部の残存状況が悪く詳細は分からない。色調は内外面共に橙色呈し、1mm以下の白色の砂粒を少量含む。16は1区P24から出土した陶器の播鉢である。外面に突帯が1条あり、口縁端部やや下方に返りがついて受け口状になる。器厚は7mmから1.0cmである。素地は淡褐色で微細な白色砂粒が多く混じる。釉調は内外面共に暗赤褐色である。内面の摺り目は密に入る。17は1区P25から出土した陶器の播鉢である。復元底径は10cm、器厚は底部が1.6cm、体部が9mmである。素地は暗灰色で2mm以下の白色砂粒を多く含む。釉調は内外面共に暗褐色である。内面の摺り目は密に入る。18は近世陶器の底部片である。底径は3.2cm、器厚は底部が5mm、体部が4mmである。底部は回転糸切である。釉調は淡灰緑色で細かい貫入が入り、外面には釉垂れがみられる。19は1

区P12から出土した有田焼の磁器碗である。器厚は2から3mmである。内外面共に施釉されるが、畳付けは釉をかきとられる。20は1区P16から出土した磁器碗である。有田焼か。復元高台径は5.0cm、高台は削り出しである。釉調は青みを帯びた白色で内外面に大きめの貫入が入り、気泡もやや入る。21は1区P36から出土した磁器碗である。体部は内湾し、口縁端部は短く外反する。器厚は3から4mmである。素地は灰白色で、釉調は緑灰色を呈し貫入がある。22は2区包含層から出土した有田焼の磁器片である。口縁端部が内面に向かってやや肥厚する。器厚は4mmである。外面には草文のような文様がみられる。23は1区包含層から出土した土鈴で英彦山がらがらと呼ばれるものである。長さ3.7cm、最大幅2.7cm、器壁の厚さ4mmである。上部に径6mmの穿孔がある。色調は淡橙褐色で態度に1mm以下の白色砂粒を少量含む。24は1区P12から出土した鳥形の土製品である。高さ3.0cm、長さ5.5cm、幅2.3cm胴部右側に径8mmの穿孔がある。棒を刺して飾るためのものか。頭部の先端は摘み出して嘴を表現している。色調は淡褐色で胎土に1.5mm以下の橙色粒を少量含む。

以上、図化したものについて記述したが、図化できなかったものの中には、赤色チャートや黒曜石、安山岩片などの石器類、土師器の小片、16世紀代の龍泉窯系青磁片が出土したが、近世陶磁器の割合が最も多い。

## IV おわりに

今回の調査で確認した遺構は掘立柱建物跡2棟を含む柱穴群と土坑1基である。遺構に伴う遺物の時期から18世紀代以降に廃絶したと推定されるため、江戸時代中後期の集落を構成する建物であったと考えられる。複数の柱穴で柱根が残存していたので、柱の根本付近を切断し、柱材を他所で再利用したのであろうか。少なくとも、建物廃絶とともに集落としての利用は終わる。調査範囲よりやや山手側に現在の集落があるので、山手側に移動したのであろうか。また、復元に至らなかったが多数の柱穴を検出しているため、他にも建物があった可能性は高い。

一方、他の遺構や遺構に伴わない遺物を観ると、試掘や本調査で黒曜石やチャート、安山岩片などが出土したことは、周辺に縄文時代の遺跡の存在をうかがわせる。中原遺跡よりやや北に位置する馬場遺跡（城ヶ迫城城下遺跡）における調査でも若干の縄文土器片が出土しており、古くから当地で人々の生活が営まれていたようである。馬場遺跡では中世の遺構遺物が出土したが、中原遺跡でも土師器や瓦質土器、龍泉窯青磁などの中世後期の遺物が出土した。馬場遺跡が城ヶ迫城と密接にかかわりがあるとすれば、隣接する中原遺跡も城ヶ迫城との関係を考慮する必要があるだろう。今回調査で確認した遺構は江戸時代中後期のものであったが、遺物の中には内ヶ磯窯跡産の陶器が含まれることから建物の復元に至っていない柱穴の中には江戸時代初期まで遡る建物があったかも知れない。また、英彦山参詣の印にもなった英彦山がらがらが出土したことは、英彦山参詣道が付近を通してことや、英彦山信仰の影響を看取することができる。

今回の調査の結果、発掘調査事例の少ない旧宝珠山村域において、近世集落の様相の一端を明らかにすることができた。また、縄文時代や中世の遺物が出土したことは周辺に該期の遺跡の存在を示すことになり、今後周辺の調査をする際には近世以外の遺跡の存在も考慮しなければならない。

# 写真図版



1. 遺跡遠景（南東から）



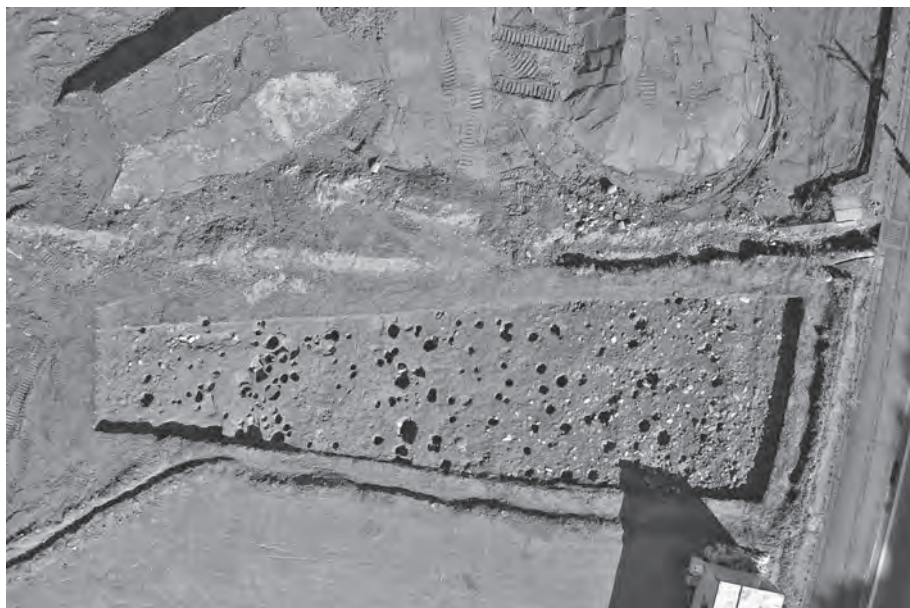
2. 遺跡遠景（南から）



3. 遺跡遠景（北から）



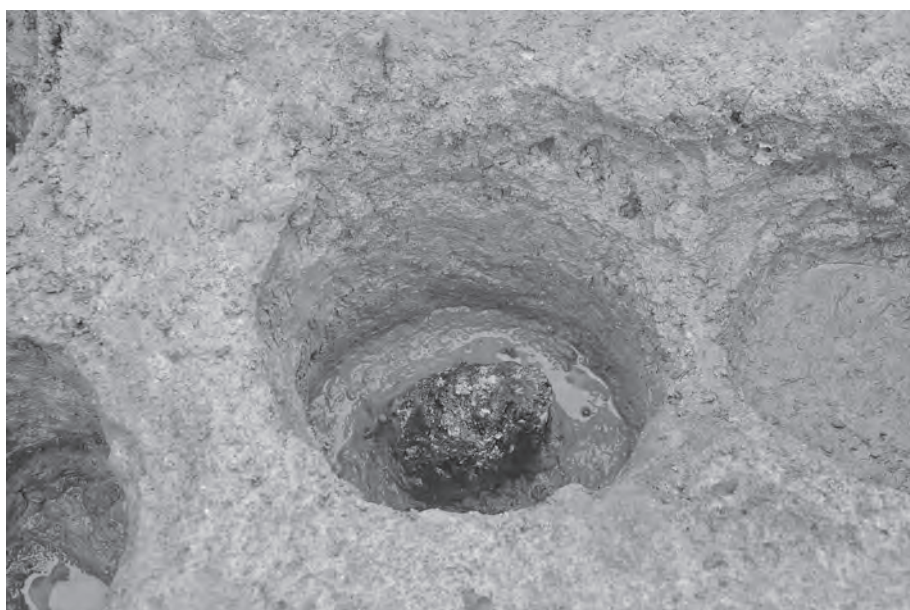




1.1 区全景

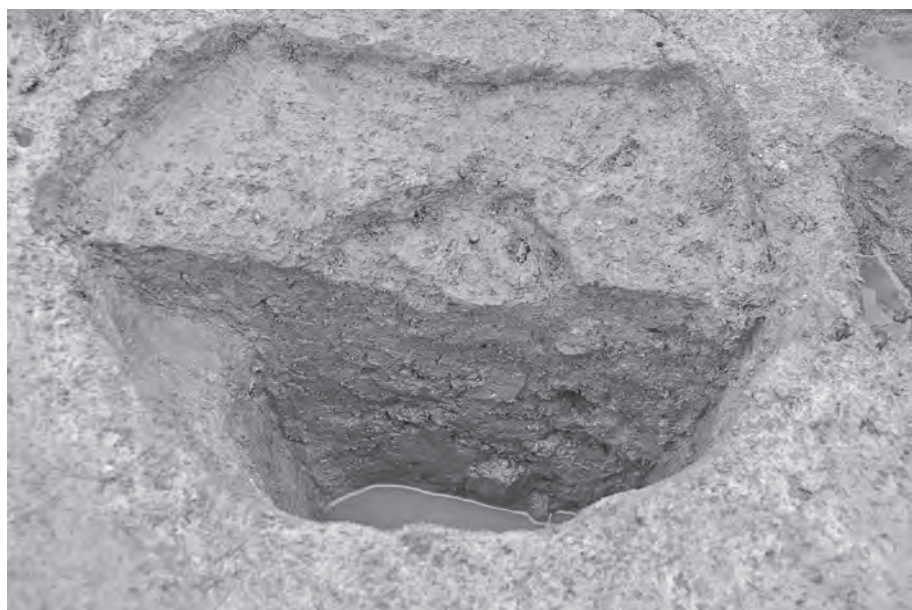


2.P12 柱根検出状況



3.P38 柱根検出状況

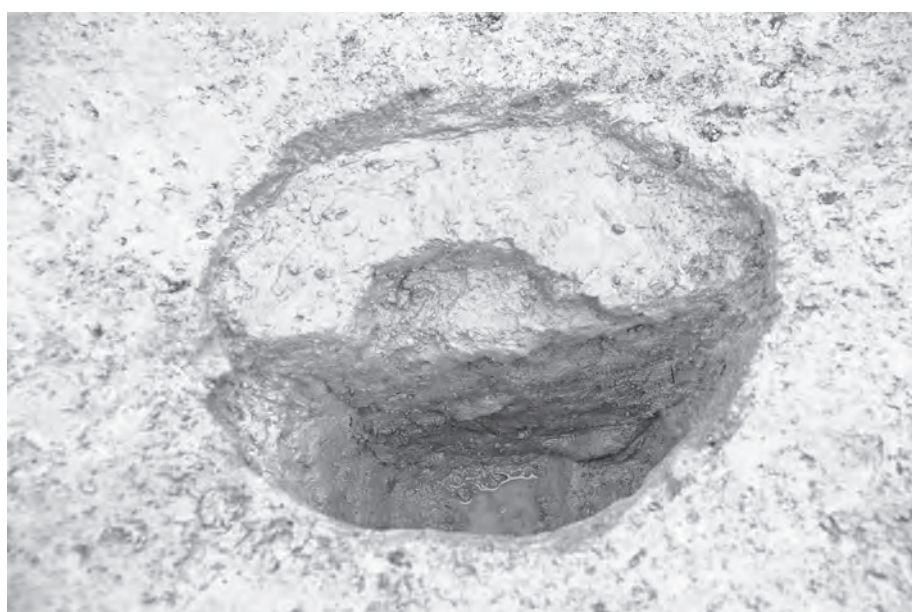
1.P39 柱穴断面



2.P40 柱根検出状況

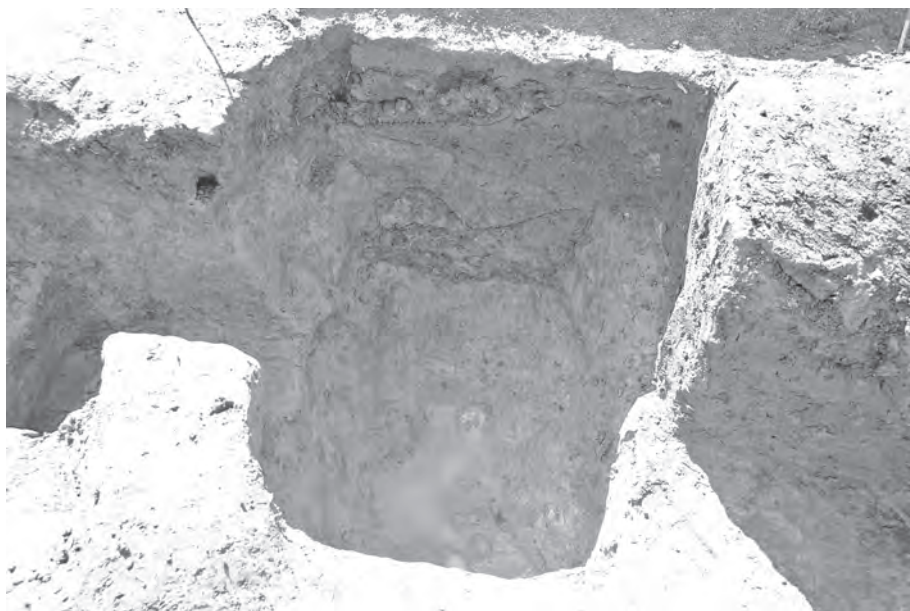


3.P41 柱穴断面

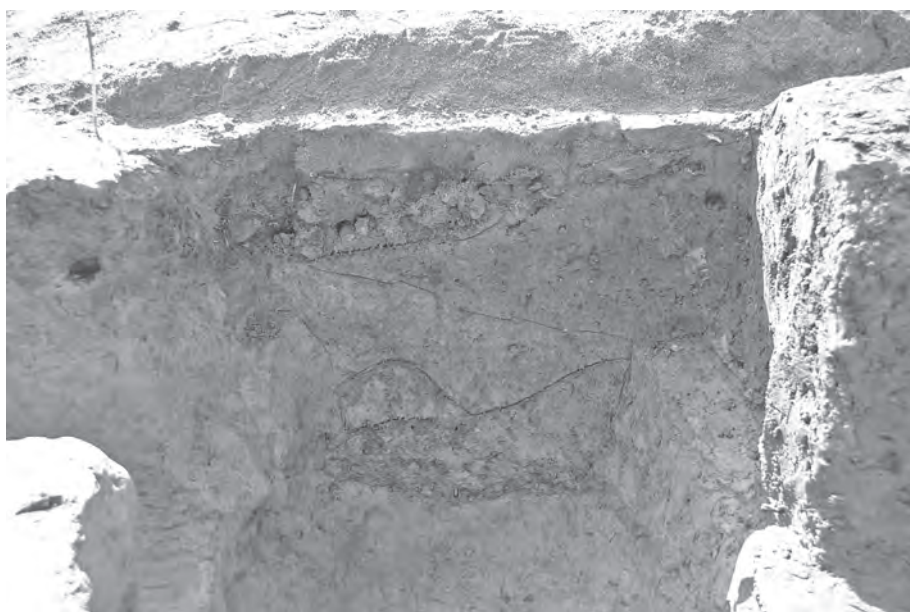




1.1 号土坑木柩検出状況



2.1 号土坑完掘状況

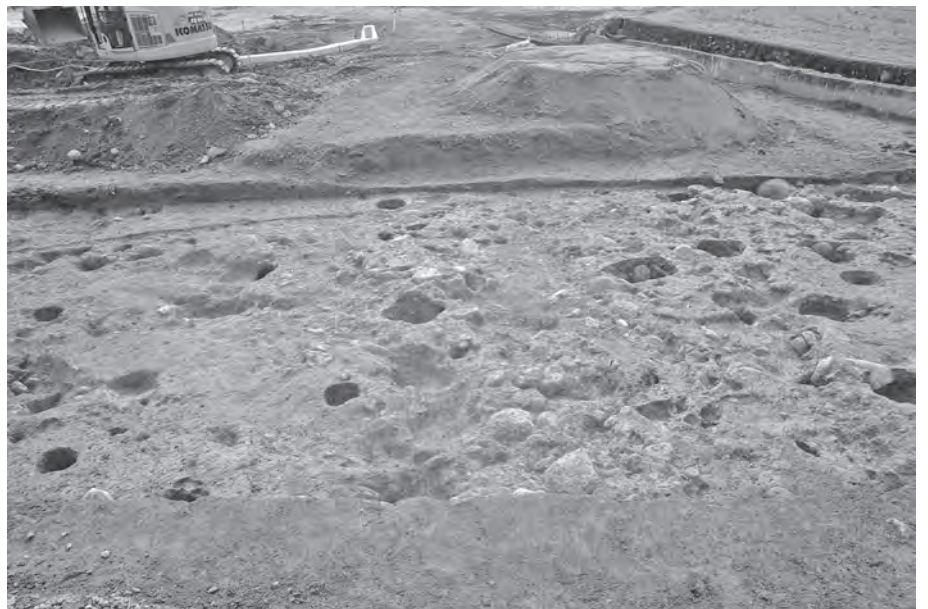


3.1 号土坑土層断面

1.2 区西端から 1/4 (北から)

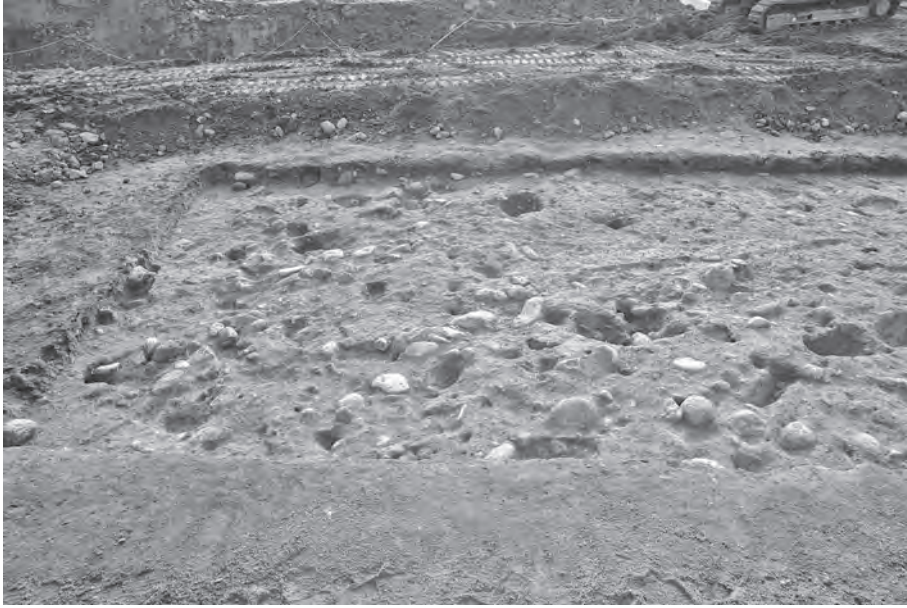


2.2 区西端から 2/4 (北から)



3.2 区西端から 3/4 (北から)





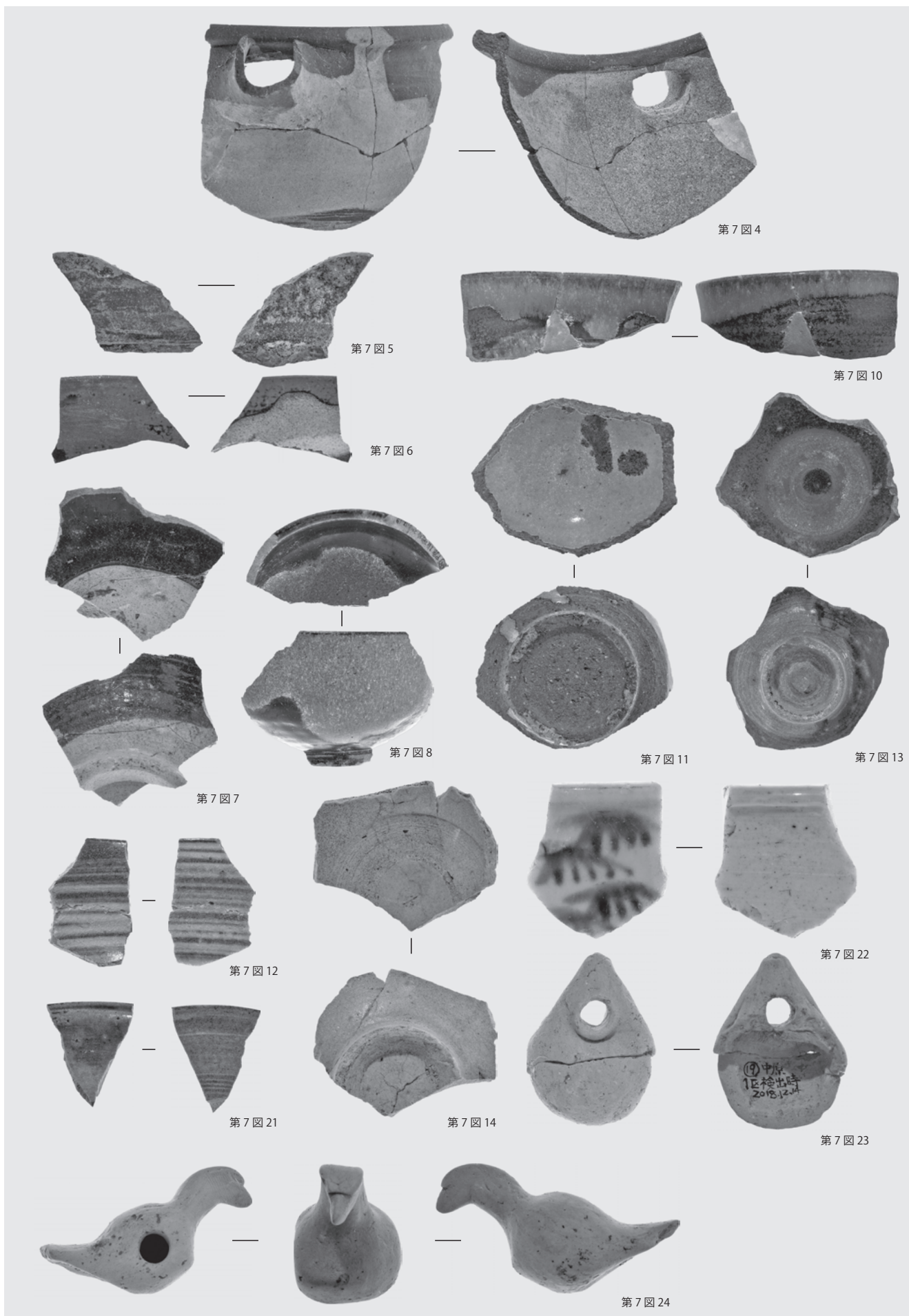
1.2区西端から4/4（北から）



2.2区P45断面（南から）



3. 基本土層（工事掘削箇所）



第7図4

第7図5

第7図10

第7図6

第7図8

第7図11

第7図13

第7図7

第7図12

第7図22

第7図21

第7図14

第7図23

第7図24

報告書抄録

ふりがな	なかぼるいせき							
書名	中原遺跡							
副書名	東峰村営住宅中原団地建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 273 集							
編著者名	岡田 諭							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3							
発行年月日	令和 2 (2020) 年 3 月 19 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかぼるいせき 中原遺跡	福岡県 朝倉郡東峰村	40448		33° 24' 9"	130° 52' 29"	2018.12.13 ) 2019.1.18	300m <sup>2</sup>	開発事業 (宅地造成)
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
集落跡	中世 近世		柱穴		陶器、磁器		中世～近世集落遺跡。柱根が残存する。性格不明だが、木杵を据えた土坑を検出した。	

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2120261
登録年度	登録番号
1	3

福岡県文化財調査報告書 第273集

## 中原遺跡

令和2(2020)年3月19日

発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

朝倉市馬田 3 3 6



